

Pat Shipman パット・シップマン著<ヒトとイヌがネアンデルタール人を全滅させた>

ネアンデルタール人も他の原人も教科書で習ったが、最近の研究でくつがえっているものが多いようだ。ネアンデルタール人は滅んでしまったこと、現生人類（我々人類のこと：ホモサピエンスというんだよ）と彼らとは生物として異種らしい、彼らは旧人類ということ、現生人類と彼らとは交配できない異種だと思われていたが、最近の研究で、現生人類の遺伝子にネアンデルタール人の痕跡があるらしい。ただ、日本列島やその近辺には彼らは居なかった、日本列島に3万4万年前の人の痕跡がまだ確認されていないらしいこと、ネアンデルタール人はヨーロッパに居た人ぐらいに思っていた。本の表紙に「イヌ」という文字が見えたので読んでみることにした、読みだすとなかなか面白い、多分こうだろうという仮説が多いけれど、右に左に検証もされている。

◎「侵入生物」とは正確にはなんだろう？もっとも簡単に定義すればそれまで過去に生息していたことのない新しい地理的領域へ移動した生物ということになるだろう。一方、侵入された側の生物、人間の介入のない地域に生息していた生物はその土地の「在来種」と考えられる。侵入生物は外来種で、しばしば侵入した生態系を破壊する。

生物絶滅の因子として、気候変動、生息地破壊、汚染、疾病など考えられる。火山の噴火や小惑星衝突など巨大自然現象によりこれまで地球規模の大絶滅が5回起きている。そして今まさに人類が6番目の大絶滅を起こそうとしている。

☆先生、絶滅生物のたくさんの分析結果から、侵入生物こそが最も一般的な在来種の絶滅原因だという。3万年4万年前の気候変動が原因ではないという。現生人類こそがあらゆる場所に侵入した、「生物史上最も侵入的な生物」となる。

☆ネアンデルタール人は、ヨーロッパを中心に西アジア、中央アジアに生息し、石器を作成、火も使用していた。人口は、2万人を超えなかったのでは。

☆ネアンデルタール人の歯石や石器の形状、化石に含まれる同位体分析から、植物をほとんど食べず、長期的に肉を主食としてきたらしい。現生人類は雑食性だが、肉という食物資源が重なり合う。大型猛獣、中型猛獣とも肉という食物資源が重なり合う。

☆同じ食物を競い合ったネアンデルタール人と現生人類のハンティングの腕前の差は、現生人類がオオカミを家畜化しイヌを手に入れたこと、コミュニケーション能力、環境変化の対応能力だという。

☆ネアンデルタール人と現生人類はかなり長い間へ併存関係にあった。

☆遺骨から得られたミトコンドリアDNAの解析結果、ネアンデルタール人と現生人類は別系統の人類だという。

☆ネアンデルタール人は男性で165センチの背丈、80キロの体重、がっちり頑丈な体つき、知能も現生人類と同じようなものでは。ネアンデルタール人は獣の毛皮を纏っていたのに対し、現生人類は毛皮を縫製していたのでは。

☆ネアンデルタール人のこと、オオカミと犬のこと、その他の歴史のことも、年々新しい説が出ているようだ。一昔前の説、10年前、5年前の説が覆されている、昔の聞き覚えは通用しない。

☆ネアンデルタール人の顔の復元像がいくつかあるが、男女ともなかなかチャーミングである。

さて、犬の話。何かで読んだか聞いた話、以前から知っていた話、おぼろげにそうだと思っていた話だけれど、と前置きして。大昔、それこそ人間は毛皮を纏い、獣を追い、木の実をつまんでいた時代、気弱なオオカミが人に近づきそのまま人と暮らすようになった。それが犬の始まりで、犬は元来はオオカミだと思っていた。先生の説、おおよその話は違いないが、科学的に数多くの遺骨を調べ、M-DNAを調べ、遺跡を調べ、オオカミでもない、犬でもない、「オオカミイヌ」と固有名詞を作っている。話はそれるが、最近はやりの、オオカミとイヌを掛け合わせた、「ウルフドッグ」とは別のものであるとおっしゃる。このウルフドッグ、初めて聞いたが、ウルフドッグは危険な個体らしいが、一度飼いならし信頼関係が生まれると非常に友好的で従順、しかも顔つきが毅然と勇ましいということで人気があるらしい。

曼荼羅はインドでは、幾何学模様や神の姿を描きいていた。曼荼羅は宇宙を表わしたものだそうで、仏教にも取り入れられ、日本においては、仏教の世界観が表されるようになった。

◎立山曼荼羅：仏教の信仰の流布、布教のために描かれたもので、檀那まわりの折、巻物になった立山曼荼羅を持ち歩き、絵解きしながら仏教の教えを読み聞かせた。またその折、立山リンドウ（胃腸薬）・湯の草・熊の胆・山人参などを土産としたのが、後の富山の薬売りの源流となった。

千年以上も前の話、佐伯有頼という少年がいた。父が愛でる白鷹を父に内緒で、その白鷹をたずさえ鷹狩りに出たが、白鷹を見失ってしまう。白鷹を探し求めるうちに、ようやく発見し呼ぼうとしたときに、熊が現れ白鷹は驚き、また逃げてしまう。有頼は怒って熊に矢を射た。手負いの熊を追って洞窟に行くと、阿弥陀如来・不動明王に出会った。熊は阿弥陀如来に、白鷹は不動明王にそれぞれ変じた姿で、有頼に立山を開かせようと呼び寄せたのだった。次に、賽の河原、三途と修羅道、女性が必ず堕ちるとされた血の池地獄などがおどろおどろしく描かれている。その対象に阿弥陀や菩薩の来迎に象徴される極楽浄土の世界が描かれ、雄山・浄土山・別山・剣岳が描かれている。山岳信仰の女人結界のなか、秋に、女人救済・女人往生のための擬死再生儀式として、女性が焰魔堂の暗闇に閉じ込められ、読経がなされ、一切に扉が開けられると眼前に浄土山が現れ、滅罪するという、女人サービスも謳われている。かの、有頼は下山して、立山大権現の大宮を建立し、一生を立山開山にささげた。

◎恵心僧都源信は平安時代の高僧。「往生要集」を著し、地獄のイメージを作り上げた人だ。法然、親鸞が続く。

夏に、「源信展」を見るために奈良の国立博物館に行った。源信とはどんな人かと思いながら中を見ているうちに、「地獄」「往生要集」という解説文と絵が目に入った。あそこの展示は毎回思うが、暗く小さく汚く（汚いというのは国宝級の遺物に対して失礼だが、古びて汚いのは仕方がない）よく見えない、本物をガラス越しに見ながら上の解説文やその拡大写真で納得するということが多かった。今回も本物の絵は、なにが描いてあるのやらよくわからない、オレのように絵を描いているものでも、「なんの絵」と首をかしげるのだから、よほど見にくい。絵には地獄の様子が描いてある、攻められ苦しむ人が描かれている、「子どもならこれは怖い」と感心する。

◎往生要集：当時「末法思想」と呼ばれ、仏の教えが一切届かぬ時代が来ると恐れられた。往生要集はその末法をのりきる方法を教え諭した。念仏に励むこと、その功德により死後極楽往生ができれば、この世が末法の暗闇に染まっても、明るい死後の世界が待っていると教えた。その内容は安心を与えると同時に恐怖をも植え付けた。悪行を積んだものが堕ちる世界が地獄、その悪行に応じてあらゆる責め苦を負わされる地獄、そういう地獄を次から次に書きだし描きだした。

◎衆生が自ら作った業により生死輪廻を繰り返す六つの世界、「六道」＜ガキ・畜生・修羅・地獄・天界・人間＞のひとつとされる。

◎太陽＜地獄百景＞を借りてパラパラ見ていると、「立山」が出てくる。何度も行った山、一年前にも行った、仏教に関係した名前の場所が多いとは思っていた、また修験者によって大昔に登頂されていることも知っていたが、ここが、「富士山」「白山」と並んで三霊山と知った。「雄山」「浄土山」「別山」「剣岳」がセットになっているとは。

曼荼羅の絵を見る。富山地鉄：立山線の立山駅から、立山連峰を見る、古地図は山を背景に描くという。左のほう、日本海側から、僧ヶ岳、猫又、毛勝らがかすかに見える。次に、剣、別山、雄山、一の越の次が浄土山、五色が原を経て薬師岳。遠くに赤牛、水晶が見える。書きながら、山の名前を並べるだけでワクワクしますねえ。立山駅からケーブルに乗って上がったところが美女平。そこからはバスに乗って室堂に向かうがその間に、弥陀ヶ原、天狗平という名前が見える。室堂にはミクリヶ池、血の池、地獄谷らの名前が見え、最近も硫黄臭の空気が流れ立ち入り禁止の場所もあるらしいが、噴火ということでは警戒対象の場所ではないらしい。昔の人はこの室堂あたりに泡ブクブク、硫黄臭を地獄と言ったらしい。室堂から左に行けば大日岳、称名川に添って下れば称名の滝に出てすぐに立山駅だ。何度も来た山の名前がずらずら並ぶ、こんな高い山にも大昔から、修験者、仏教者、神教者らが登っていたんだね。

大島直行著<縄文人の世界観>

◎縄文時代には科学と哲学がなかったと考えるならば、ものをリアルに表現する発想は希薄だったはずで、考古学者は縄文人の造形を、先史芸術や原始美術などという表現を使って解釈しますが、醜いものと区別するための「美」という観念をはじめとした哲学的な見方がないないとしたら、縄文時代に、いわゆる芸術が発生する余地はありません。おそらく縄文人の造形には、芸術や美術といった意識はないはずで、縄文人の造形はあくまでも再生をシンボライズするための呪術信仰的な行為にすぎません。人間が、自然と向き合うことをやめ、人間と向き合うため、「人間とは何か」「美とは何か」と言ったことを考えるようになったのは、ソクラテスやプラトンの時代からなのです。（ソクラテスやプラトン-BC400年ころ-が生きた時代は、日本列島は縄文時代でした 弥生時代の誤りでは？）

◎ミルチャ・エリアーデは、世界の神話や伝説、民族誌をひもとく中から、月-雨-水-豊穡-女性-蛇という文脈が「周期的再生」のシンボルとして見出されることを指摘しています。私もこれに倣いながらも、狩猟採集社会では、農耕的な「豊穡」の要素を除き、月-水-女性（子宮）-蛇の四つを、再生のシンボリズムの中核として捉えます。

◎先生最後の章で、<アンディ・ウォーホルの言葉を：死んでも自分の存在は消えないって人がいるのが理解できない。自分が死んでも、すべては自分が死ぬ前と同じように続くんだけ。ただ、そこに自分がいないってだけだ。>この言葉を聞いて、「へええ あの絵描きのことかな」死に対する考え方、オレも同じように思う。カレとオレとでは社会的に大いに違う、地位と名誉と金、という言葉通り、大いに違うが、「オレが死ぬ その存在が無くなったところで 社会には朝が来て 昼が来て 夜が来る オレだけじゃなく 君も あなたも ですよ」

◎現代人は合理的思考をよしとして、非合理的な考え方を極力排除しようとする。日本列島で合理的思考が優越するのは、弥生時代からです。自然をコントロールしない狩猟採集生活では、人々は、樹木や川にまで再生あるいは誕生を見出すような神話的な世界観で生きています。死に対して、現代人は、葬儀や埋葬は多分に社会的で文化的な行為です。これに対して縄文人は、再生のシンボルを添えて埋葬しています。祖先や祖霊といった観念を持たず、死を扱う文化の存在も考慮すべきです。

◎この本を読んで、「ムム・・・」と考えた。先生は縄文人のマインドを考え、オレの好きな縄文土器や土偶たちの造形を、再生、黄泉がえり、のためのものとおっしゃる。「この考えは正しいのだろうか」以前、美術品、造形品の寸法を測って、「やはりこれらは 黄金比率になっている」と頑なおっしゃる方がいた。大島先生の考えは、黄金比率思考の方と同じように偏っているのか、すごく真つ当な考えなのか、疑問符がわいてきた。この黄金比を言い出した方は、八ヶ岳の「尖り遺跡の縄文のビーナス」の寸法を測り、「ここに黄金比がある」と言っておられた。オレは、尖り遺跡の縄文のビーナスも他のものも、美術品だとは思わない、当時の人が、「単なる手慰みか」「ちょっと棚に飾りたいただけか」「土で遊んでいたならこんなものができた」という程度のもので、それを現代人のオレが見て、「おお おもしろい 形がいい 色がいい」と思っている。他の土偶にしても、火焰土器、縄文式土器にしても、「おお おもしろい 形がいい 色がいい」と見ている、それ以上の解釈は無用だった。学芸員や学者にたいして、「なんでそんなことを おっしゃるの」というふうになってしまう、「そんなふうには考えなくても・・・」

◎記録が残っていない歴史は、遺物でしか判断材料がない。遺物があれば、科学的な判定はわかるが、思考・マインド・精神ということになると、「先生方 好きにおっしゃって」の世界である。東北の捏造おじさんが、掘り出した遺物を見て、「石器人にも 死に対する マインドがあったのだ」と言っていると聞いたことがある。縄文人が造っていた土器や土偶、造りながら、飾りながら、壊しながら、何かの心を揺らし、祈りをささげ、美しさを込めていたのか、いなかったのか、わからない。言えるのは、縄文人作の土器や土偶、「ほんと おもしろい 好きだねえ」

展覧会をご覧いただきましてありがとうございます。今年はこちらが三回目の展覧会です。三月に大阪市で、五月に愛媛県伊予市で、十一月の今回が茨木市で、来年の話になりますが、三月にはまた大阪市で展覧会があります。こう何度も展覧会が続きますと、気ぜわしく忙しい日々を過ごしております。展覧会の案内状に空きスペースができましたので、<えかきのぼやき>として、下記の文を載せました。

なんと、オレも、よわい七十歳を過ぎ、やや呆けてきております、これは社会生活の上でも、身心的な面でも色々その現象が見られます。その呆けを逆手にとって、「歳じゃ ごめん」と生きていこうと思います。「もう なにもいらない 欲などはない 絵さえ描けりゃ」と本音ともたてまえともとれる叫びを、つぶやいております。

山の中を歩きながら、「花が きれいだね」と愛でる先輩がいた。「そうですね」といいながら、「オレの アトリエは 百花繚乱だよ」と思っていた。最近山に入ると、花や、木や、鳥や、虫の名前をもっと覚えておくのだったと後悔しているが、いまさら脳の回転が悪く覚えられない。

呆ける、そうですね、若いころなら何事も、何時間も追い続け、手足を動かし続けていたが、できなくなった。「ちょっと 休憩」「ぼ～っ」とした時間を挟むようになった。考えてみればこの、「ぼ～っ」とした時間もいいのかもしれない。若いころは寸暇を惜しんで何事もこなしてきた。この、「こなす」ことが、日々の目的だったのかもしれない。「こなす」ことが、日々の目的ではさびしいものね、本当の目的はその横に在ったのかもである。負け惜しみかもしれないが、「ぼ～っ」とした時間が、枯れかけた脳に、少しでも潤いを与えてくれているのかもしれない。今このことを考えながら、考えがコンピューターに及んだ。昨今のコンピューター氏は、碁や将棋やチェスの名人よりもすごいという、あれもこれもとあらゆることがコンピューター氏にとって代わられた。「まさか 絵は描けないでしょう」とたかをくくって数年で覆された。コンピューター氏は、“必要条件”“絶対条件”さえ守れば答えを即座にだしてくれるが、「ぼ～っ」とした時間やら余裕やらはないでしょう。それともこれも時間の問題で、「ぼ～っ」とした歪みをそのうち会得するかもですねえ。

「え まだ山に登ってるの」「そうなんですよ 登っています」何が好きなのと聞かれたら、山の中を歩くのが好きなんですねえ。山は歩くだけじゃなく、山に向かう道中、山のご一緒する仲間、山で食べる食事、山で飲む酒、山で寝るテント、様々ありますが、考えてみると、「山の中を歩く」これに尽きますね、あとはおまけです。「そら～しんどい」ですが、こけたり踏み外したりしないように、下を見て地面を見て歩きます。安全な場所では、まわりを見、「景色がきれい」とか、「天気が悪くなりそう」とか考え話します。そんな折、花や、木や、鳥や、虫の名前を知っている人は、「や みつけた」「この虫はまだ子どもなんだ」と教えてくれますが、オレの記憶能力が希薄で、よくいう右から左です。山仲間て花を愛でる人がいて、花の名前を覚えてくれたが、「オレの アトリエは 百花繚乱だよ」ということで、パイと花に背を向けていた。アルプス一万尺の山々には、「お花畑」という言葉があり、夏の二カ月の間に花が咲き誇っている場所をいくつも見た。山の花は小さく、せいぜい服のボタンぐらいまで、赤・白・黄・紫というような色が多かった。

◎今年の花のことで、台高で見た「ホソバナヤマハハコ草」と北沢峠で見た「フジアザミ」が忘れられない、素晴らしかった。この歳になって、オレもいう、「見せてやりたいよ・・・」

◎木もここ十年ぐらい、気になる山の木がいくつか。まず、ブナですね、寒冷地の木なので関西のこのあたりでは、千メートルぐらいの高地にによきによき、でっかい大木を何本も見つ。ミズナラ、トチこれらもいい。

◎鳥は山ではわからない。ライチョウは何度も見た、夏毛も雪毛も。アルプス一万尺にカラスが舞っているのには幻滅だねえ。鳥も虫も、近所の安威川がいい。いくつかのサギ、カモ、ウ、カラスもハトも多い。今はバツタの季節、バツタバツタ、飛び回り自転車で走ってもその前を、右に左に、バツタバツタ。

◎このようなことを考えながら、ぼやきながら、日々絵を描いております。

安威川報告：久しぶりに、ちょっとのま晴れるらしい。毎日毎日だったら雨が続いた、今日も午後からまた曇って降るといふ、明日も明後日もあやしいといふ。しかも三四日あとに台風が来ているといふ、「天気さん どうなっているのでしょうか」天気予報の解説を聞いていないので、どういう現象で雨が続けているのかわからないが、秋雨前線という言葉もあったかな。十月の今ごろはあまり雨が降らない季節だと思っていた。考えてみれば十月十日にオリンピックの開会式があったのはもう五十年も前、調べに調べて、十月十日は快晴の確率が高いといふてからもう半世紀も経った今、宇宙のごきげんもちょっとは変わったかもしれない。

それいけ、今のうちだ、と安威川の河川敷に来ている。昨日も一昨日も来た、「ちょこっと 降りかな」と隙間をぬって出かけるが、小雨の降る中、水たまりの中に足を入れ、靴も靴下もずぶ濡れ、「ええい 今日も 濡れるのだ」と毎日濡れた運動靴、三日間、濡れっぱなしの靴でバシャバシャ走っている。気を付けなくてはいけないのが滑ること。河川敷の歩道は、コンクリートの上に、アンツーカー色のコンクリート？を塗ってある。きれいで、「ここが遊歩道だよ」と整備されているが、水がたまる、泥がたまる、これでツルリンである。

今日は安威川右岸を上流に向かって走っている。もうこの走り始めて何年になりますかねえ、五十歳ぐらいから川で走り始めた。四十歳代は駅前のジムに通っていた、ほとんど毎日通っていた、当時は、「ここが最高だ」と思っていた。元来がまったく運動音痴、生まれて四十歳ぐらいまでは、走ることも、球を追いかけることもしなかった。「めんどくさい しんどい 運動なんて オレじゃない」とまったく見向きもしなかった。まだ三十歳代なのに、「飯がまずい 胃がゴロゴロする こんなことではいかんのでは」と思いつつも、犬の散歩も自転車で行っていた。まだまだ当時は茨木も田園地帯で、5分も行けば田圃の中、そんな畦道を自転車で10分ほど走っていた。田園風景の自然はそれなり気持ちがいい、気に入っていた。「ちょっとだけ歩いてみよう」と自転車を置いて、犬の鎖をもって歩いた。たった10分ぐらい歩いただけで終わっていたが、なんだか身体を動かした、気持ちがいいと感じていた。

近所の絵かきの辻君に誘われ、ボディビルのジムに行った、「場違いだな」と思いつつ、通い続けた。そこは本格的なボディビルダーが経営する、マッチョジムだったが、経営者にほだされ、「えい それえ」と鉄アレーをもち上げていた。そこが経営難でつぶれ、駅前の普通の大きなジムに変わった。そのジムでは歩く・走る・ストレッチ・鉄アレー・風呂などをこなして通い続けた。一時はプールでも泳いでいた。絵を描いて、バイトをして過ごしていたが、世の中の不景気とコンピューター出現で、アルバイトの仕事が減り資金不足、運動ジム通いもやめた。もう四十歳代はどんどん山にも登っていた。「ジムをやめよう 山が自然なら 川も自然」と河原に行ってみた。河原に行きはじめたころには、大阪体育大学はもうすでに移転してなかったが、大学があったころには、体大の学生が河原を走っていたように記憶する。河原走りをはじめたころは三日に一度ぐらいのペースで、左岸を上流に向かって走った。堤防内部の河川敷には、アンツーカー色に塗られた遊歩道、そこを、阪急電車を超え、JR鉄橋を超え、名阪高速を超え、安威の近くまで走った。遊歩道には距離の目盛りが打ってある、五十歳ころには毎日、5キロ往復の計10キロを1時間ぐらいで走っていた。当時はいわゆる橋の下に乞食がたくさん寝ていた、今風にいえばホームレスのおっさん連だ。橋自体が十も二十もあって、その両端にそれぞれ居を構えていた。しばらくして行政が柵をこしらえ彼らはどこかに行ってしまった。

川の流れが変わる、大きさに言えば地球の形が変わる、これはよくわかるね。今でこそ、この安威川の両サイドには大きな土手が築かれ、内側にはコンクリートブロックが張ってある、少々のことではこの土手は潰れない。しかし今、オレが走っている河川敷から5キロも上流は高さが300~500メートルの山が連なっている。その山々にきつい雨が降ればたちまち増水し濁った水がどんどん流れる。きつい雨が長時間続けば水嵩は増え、河川敷を超えて人の背丈まで増水することが年に何回かある。雨がやみ終わった翌日に、「さあ走れるかな」と自転車で土手下までやって

きて階段を上り川を見ると、「わわ まだ水が引いていない」とか、「なんとか走れそうだが 靴が汚れそう」なんて独り言をいっている。大雨の増水は、山の土砂を下流に運ぶ、それこそ山の中の鉄砲水なら、人の背丈も超えそうな大きな岩を押し流すが、ここら辺りではせいぜい拳大の石ころ、少し下流に行くと、あらい砂、次に細かい砂、その次が粘土だ。川が蛇行して曲がっているところに多くの石ころや砂を落としていく、土手のすぐそばが一番多く斜めに土砂が積もっている、きつい雨が長時間続いた時には、50~60センチの土砂が積もる。コンクリートで守られた護岸がなければ水は溢れ川の形を、平地の形を変えるだろう。こんなことで昔は年々川の流れが変わって、中洲の姿が変わって、平地の姿が変わって、大阪平野ができてきたわけだ。

安威川の川幅はどれくらいあるのでしょうかと調べたら出ていました。オレがよく行くあたりでは、80メートルぐらいだそうです。安威川は京都の亀岡が源流で、淀川水系の一級河川、そのまま大阪湾にそそぎます。

ヘリコプターの話：以前から気になっていたのがヘリ。オレはこの安威川にいる時間は1時間強、この間に必ずどこかで飛んでいる、「何をしているのか」事件でもあれば何機ものヘリがグルグル旋回しているのでわかるのだが、毎日のように見たような機体がどちらかに向かって飛んでいる。以前八尾空港の近所に行った折に歩いていると、「あのヘリじゃないの いつもみるヤツ」と思われるヤツが、空港の端に止まっていた。見覚えのある色と形、特徴のある尾翼、「ひよっとしたらあれは ヘリ操縦教習所の専用ヘリでは」と勝手に思っている、それでキャツは毎日のように八尾から北に向かって10~20キロと日に何回も往復しているのでは。それ以外の機体も飛んでいる、回っている、なにを調べているのやらわからないがいつも何機か舞っている。カメラマンの中西さんが、ヘリに乗るのが好きだ、ヘリから写すのが好きだ、ただ1時間、10~20万円の価格だそうだ。セスナはめったに見ないねえ。

鯉：安威川にはでっかい鯉が悠々と泳いでいる、水の中がよく見える、60~70センチ、太ももぐらいありそうなでっかいヤツらが群れている。鯉は茨木市内の農業用水路にも見かけるようになった。子供のころは大きな鯉など見かけなかったが、これはみなさんご馳走に食っていたからだと思う。50年60年前の川には、鯉の仕掛け、ウナギの仕掛け、フナの仕掛け、とたくさんあり、みなさん川魚をご馳走として食っていたのを覚えている。鯉も最近では食わなくなったのでは、安威川に毎日のように出かけてきている太公望のおっさん連も、歓喜の声で目を輝かせて釣り上げた太物サイズを、計測して放している。たぶんこのあたりの川魚、臭くて食べないだろうね。もっとも少し上流の、安威辺りには、プロまがいのおっさんがウナギの仕掛けをいくつも沈めているのを見かけたことがある。ウナギは今や超高級魚だもんね。

今は平日の午前中ということもあるのだろうけれど、じいさんが多いねえ。オレより年上そうな人、年下そうな人、走っている人、歩いている人、座っている人、ばあさんもたまにはいる。

ストレッチをしている目の前で、カモが大騒ぎ、よく見るとあれは子ガモたちだ、まだまだ親のそばを離れられないが、多少身体も大きくなって、水の上を7,8匹がグルグル走っているのか飛んでいるのか、パイパイ鳴きながら水の上を跳ねまわっている。まだまだ遊びたいさかり、ちょっと悪ガキになった年頃、かわいいねえ。カモは雑種交配が多いとか、どういう種類のカモなのかはわからない。向こうにきれいなオシドリ風のやつもいる。

今は選挙期間中、市議員の時ほどうるさくはないが、時々宣伝カーが走っている。今回の衆議院選挙、これはいやだねえ、腹が立つねえ、まったく無視、ニュースも解説も聞きたくない。今の政治家にとって政治は“ゲーム”なのか、“勝ち負け”なのか、「金と名誉と地位」を得るための“職業”なのか。いやだねえ。

衣川さん：今回の選挙では「保守」と「リベラル」が対立していると報道され、政治家もインタビューでは、「私リベラルではなく保守だ」「私はリベラルで保守ではない」なんていっている。この政治家たちは保守とはどういうことか、リベラルとはどういうことか、その定義なりその言葉のお意味を深く考えて使っているとは思えない。

「保守」とはその地域の伝統を大切にして、頭で考えただけの浅い知識で変革や革命をすることに慎重な態度をとる、だから「保守」の反対語は「伝統を無視した革命や性急な改革」です。人間の伝統というのは何千年という長い年月にさらされて残ってきた含蓄のある文化なので、現代の思いつきのような合理的考えで、簡単に変えてはかえってよくないという考えが基本的にある。

「リベラル」というのは個人の自由を大切にする、個人の権利も多様性を大切にする、従って偏狭な独善や差別、強制に反対する、物事の判断はその視点から非暴力的に解決しようとする、さらにもっと言えばいろいろな欲望からも自由になる、欲望からもフリーになることも含めたい。ただここまで含めると高尚すぎますが。だから「リベラル」の反対語は「全体主義」です。

保守とリベラルは対立する概念ではないのに保守かリベラルか問うのは間違いです。ぼくは自分のことをリベラル保守だと思っています。

今回の選挙では立憲民主が躍進するらしい、希望の党が嫌いなのでこれより当選者が多いとうれしい。小池百合子さんはタカ派・全体主義的、中国・朝鮮敵視で、性格も傲慢・独善・腹黒そうで嫌いだったのですが、東京で圧勝して苦々しく思っていたが、ようやくみながこの人がどういう人かわかったようで人気落ちた。東京の都民ファーストや大阪の維新なんてしょせん内容の無い流行の党。大阪の知事に横山ノックが当選、東京の知事に石原慎太郎や小池がなったのと同じ低次元のレベル。選ばれた政治家をみればその大衆のレベルがわかるというのがそのとおりですね。

今の政治の世界でいえば、TPP やグローバルやカジノは「保守」とは相容れない、これは革新派の考えです。共謀罪や安全保障法、戦争法、中国や朝鮮に対する差別、好戦的態度は「リベラル」とは相容れない全体主義派です。だから今の自民党、維新の会、希望の党は「全体主義的な革新政党」で、社民党や共産党の主張が「保守的なリベラル」とも言える。

上西：衣川さんから難しいメールを頂きました。政治の世界での「保守」と「リベラル」、ましてや自分が保守かリベラルかなど最近では考えたこともない。とまどい、迷い、思いつくままを文章にします。

「保守」と「リベラル」は「右翼」「左翼」と同じようにイデオロギーの範疇に入る言葉ではないかと思います。若い頃、お前はイデオロギーが無いと言われショックを受けていたことを思い出しました。

「リベラル」という用語は確かフランス革命のときから使いだされたと記憶しています。「保守」も同じですが、その後、その意味合いも時代の変化を受け若干の変化を受けて今日に至っていると理解しています。

さて、自分にとっての「リベラル」「保守」昔は重要な項目でしたが、今ではどうでもいいという気分になっています。理由は老人になり、社会へのアクション・かかわりを持たなくなり、徒然なるまま毎日を送っている身には、難しいことは分かりませんし関心も起りません。

例えば今回の選挙にしても「安倍一強」は倒さねばとおもっていましたが、途中の調査で若い世代ほど安倍支持が高いとの結果を知り、興味が無くなりました。雨の中、一票を入れに行きましたが、大阪7区「自民」「維新」「共産」の3名で入れる候補者がいない。変な選挙制度です。

開票の結果自民が解散前と同数。日本の選挙民の選択からいえばこんなものかと思い、今週の選挙の解説や今後の政治に関する記事、評論、TVのコメントは一切、年寄りには縁遠い意話として避けています。

もう一度「保守」「リベラル」に戻ります。難しいイデオロギーの話は理解できないので省きますが、自分にとってどうなんだということは少し考えてみました。今の自分は「超保守」の範疇に入るとというのが結論です。理由は身体の衰えから新しいアクションを起こす気力も体力もない。さらに大学院を辞め、家に閉じこもると生き生きとした新しい生の情報が全く入ってこない。そしてこれが私のイデオロギーなのですが、世の中の「スピード化」「便利第一主義」「うわつらの豊かさ」に反対。バロメーターを「昭和」の後期に置いているようです。したがって、「超保守」だといわれても「遅れて入る」といわれても違和感はないし、それで結構。年寄りの我が道を行くからほっといてくれというところですよ。

昨年鬱になる前、ダーウインの『進化論』を読みました。どこにも人間は進化したなど書かれてない。人間も生物も「適者生存」の法則で、今生きているものはたまたま今の環境にあっいて、今後生き続ける保証は全くない。なるほどと思いました。今の政治家と称する種族はこの法則を知らずして、右往左往しているように見えます。

おふたりの話を読んで、ふたりは若いころから政治運動に熱心で、よく考えている、よく活動していると感心しました。そのてんオレは、いわゆる、「ノンポリ」で過ごしてきた、弟も含め、学生運動をしていた方々から、「革命だ」という言葉を聞きながら、「ポカ〜ン」としていた。1960年70年代の学生たちの目標が、革命だったのか、革命という言葉を使った変革だったのか、わからないままに過ごしていた。今回の選挙、「え 突然選挙・・・」「政治家は勝てばいいのか ゲーム感覚か」とむかつ腹がたって、一切ニュースも見ず選挙に背を向けていました。

選挙後のニュース解説で、「保守」「リベラル」の話がかまびすしい、学者がおでまし、いたく解説をしている。リベラルのことで、「争う 考えを異にするお互いが 相手の価値観を尊重する」といういい言葉を見つけた。今の日本の政治家の世界、「国を守る 天皇制を守る そのためには アメリカとの同盟 強兵が必要」という人たちが保守を名乗っている。一方「国民を守る 生活を守る いまの憲法を守る 戦争をしてはいけない」という人たちがリベラルを名乗っている。そんな簡単で単純なものではないよと叱られそうだ・・・。

世界の政治指導者は、「我が国が勝つ」「我が国が儲ける」「我が国が指導する」というように自国の利益を叫びだした、自国の権利を叫びだした、国が守らなければいけない義務やモラルが吹っ飛ぶぐらいに、みなさん、自国のことを叫んでいる。

生物にひとつである我々ホモサピエンスが、異常に増殖し、知恵を駆使して日々地球を改革改築していく。若いころに、「我が国を発展させたい もっともっと発展させたい 文化的で 文明的で 世界にかんたる日本にしたい」と熱をこめて話していた人、それを聞いて感激していた人、当時の日本人のほとんどが、より発展を願ひ目指して日夜奮闘努力をしていた。当時、オレも、発展はいいことだ、素晴らしいと思い、身体を動かしていた。何年か前に友人が、「縄文時代は 一万年も続いた 発展もなしに」とつぶやくのを聞き、「たった百年で 日本の 変わりよう 街の変わりよう 考えの変わりよう これはよくない」と思うようになった。